

加藤 東籬（かとう・とうり）

1、プロフィール

歌人。和田山蘭と蘭菊会を興し、「東北」「創作」「黎明」などに参加。終生、県内において、晩年に至るまで作歌活動を続けた。独学による教養によって思索者の風貌もあった。

<生没>

1877(明治 10)年8月 21 日 ~ 1944(昭和 19)年4月 21 日

<代表作>

歌集『加藤東籬集』『啄木鳥』『加藤東籬全歌集』

<青森との関わり>

北津軽郡松島村(現五所川原市)生まれ。郷里において農業に従うとともに、村長の職にもついた。

2、作家解説

本名は定一。生涯、村を離れず松島村書記、助役、村長などを歴任した。明治 17 年吹畑小学校入学、21 年北辰高等小学校に入学。青森師範学校、東奥義塾に入学したがいずれも病気のために中退している。同 39 年和田山蘭と短歌研究会蘭菊会を興し、県下から参加する者 30 名を数えた。この時期金子薫園の短歌研究会にも入り、諸雑誌にも投稿した。44 年和田山蘭、越前翠村らと東北詩社を興す。同詩社の雑誌「東北」は若山牧水、金子薫園、三木露風の参加もあって好評であり、その廃刊(大正 2 年)は惜しまれた。明治末年から出詠し始めた「創作」での歌は、若山牧水に認められ、たちまち最上級の扱いを受けた。彼の歌業を代表する『加藤東籬集』(大正 5 年刊)が、創作社叢書の第一編であることも、牧水の評価を裏づける。彼の「創作」での活動は断続的であるが晩年を迎えても意欲旺盛であったことは注目される。「創作」と平行して地元短歌誌「黎明」での活動も重要な功績にあげられる。

同誌の結社黎明詩社から、小冊子『啄木鳥』(大正 11 年刊)が黎明叢書として出版されている。牧水評によると東籬の歌は重く沈んでいるようで澄んでおり、瞑想的、静観的でもあるといわれ、寂しという語が多用されている。

病弱のために果たさなかった学業への意欲は、反面で読書家東籬を形成した。老子などの漢籍や社会主義の文献、木下尚江の小説なども読み、危険思想家と見なされたこともあった。この面では東籬の視野は時代の先端にふれるところがあったが、彼の歌は時流に影響されること少なく、静かに自己を守り通したといえる。

3、資料紹介

○『加藤東籬全歌集』

図書

1976(昭和 51)年 12 月 11 日

190mm × 135mm

五所川原市立松島小学校創立 100 周年記念事業として、加賀谷健三が編集し、加藤東籬歌集刊行委員会より発行された。『加藤東籬集』『啄木鳥』の歌を中心とし、それらの歌集に収められなかったものをも含め東籬の全生涯にわたる 3132 首の歌を収録している。